

三洲と松菊

長三洲著「内閣顧問木戸公行述」に寄せて

2021年6月5日 中島久夫

1

三洲と松菊の生涯

三洲長？



- 天保4年9月23日（1833年11月3日）生まれ
- 明治28年（1895年）3月13日没（享年62）
- 諱は？（ひかる）幼名は富太郎、のち光太郎、太郎、字は世章、号は三洲のほか、蝶生、韻華、秋史、紅雪、？客等。

松菊木戸孝允



- 天保4年6月26日（1833年8月11日）生まれ
- 明治10年（1877年）5月26日没（享年43）
- 諱は孝允、生家は和田家、7歳の時桂九郎兵衛の嗣子となり、桂小五郎と名乗る、1865年に藩主毛利敬親より「木戸」の苗字を賜り、貫治、準一郎と改め、松菊、木圭等と号す、その他多数の変名を名乗る。

2

長三洲の略歴 1

- 三洲は、弘化四（1847）年1月から嘉永三（1850）年の4月に至る約三年間、廣瀬淡窓の晩年に咸宜園に学んだ高弟の一人で（中途、咸宜園を離れて帰省していた期間がある）、咸宜園の月旦評では、最終的に九級下を獲得して退塾している。
- 安政二（1855）年6月11日から安政三・四（1857）年頃に至る、約一年半から二年の間、廣瀬旭莊の大坂咸宜園に都講として招かれ、旭莊のもとでさらなる研鑽を積む。
- やがて、毛利家の長州藩（山口藩）との関わりを深め、文久三（1863）年に高杉晋作が創設した元治元（1864）年の6月に正式に入隊し、その年の8月の四国艦隊下関砲撃事件の際には、奇兵隊士として前田砲台を守って、後頭部を負傷。
- この四国艦隊下関砲撃事件後、三洲はこの時期の奇兵隊総監赤禰武人と行動を共にすることが多くなるが、赤禰の失脚後は九州に潜航し、小倉藩や西国郡代の厳しい探索の中、九州各地で遊説し、謀議を重ねて、討幕運動の蜂起を画策するが、その試みは悉く失敗する。

3

長三洲の略歴 2

- 慶応二（1866）年の第二次長州征討（四境戦争）以後、三洲は奇兵隊に復帰し、明治元年の戊辰戦争においては、奇兵隊書記として北越への遠征に従軍し、長岡藩との激しい闘いを経験。
- その後、山口に戻った三洲は、しばらくは長州藩の学制改革等の内政に携わった後、明治三（1870）年、奇兵隊等の諸隊の叛乱に際会し、図らずもこれを鎮圧する立場（三洲起草の「閩藩人民二告諭書」が残されている）となるが、その過程で、おそらく初めて木戸の知遇を得て、親しくなる。
- そして、おそらく、木戸の推挙を得て、明治新政府の官僚となり、木戸の死後、明治十二（1879）年に、自ら官を辞するまで、制度局、文部省、宮内省、地方官会議書記官、修史局といった明治政府の諸官庁の役職を歴任している。
- この間、特筆すべきは、明治四（1871）年に日清修好条規締結のための欽差全権大臣従二位大蔵卿伊達宗城一行に随行し、天津を訪れてい交渉相手の清国側トップは直隸総督李鴻章のことや、~~同~~五（1872）年8月2日に発令された学制（太政官布告二百十四号）の制定に際して、文部卿大木喬任の下、学制取調掛の主要メンバーとして学制の起草に当たったことであろう。

4

長三洲の略歴 3

- 明治十二（1879）年の退官後、三洲は一文人として余生を送ることになる。
- 翌治十三年（1880）年には、漢学の復興を目的として、宮内庁の支援のもと、岩倉具視・谷干城・川田蕢江・重野安繹・中村正直・内藤耻舅・廣瀬進一・岡本監輔等とともに「斯文学会」を創立に参画。以後三洲は文学編集委員を務めたりしている。
- 明治二十三年（1890）年には、漢詩専門雑誌『咸宜園』の発刊にも関与。
- 明治二十五年（1892）年永眠。享年62であった。
- 著書としては、死後出版となった自選の漢詩集『三洲居士集』全十一巻が、明治四十二年（1909）年、息子の長壽吉編により、西東書房より刊行されている。その他、木戸と関りでは、やはり死後の明治二十八（1895）年に『草行松菊帖』（青木嵩山堂）が出版されている。
- もう一つ木戸との関りで無視できないものに、『新聞雑誌』に静妙子名で掲載された論策「新封建論」と「復古原論」がある。

5

「内閣顧問木戸公行述」を伝えた 村田峯次郎という歴史家

- 村田峰次郎（1857-1945）、山口県出身。歴史家。
- 名は春信、号は柳外・聴秋・春雨・看雨。
- 長州藩の天保改革の立役者、村田清風の孫に当たる歴史家で、大津唯雪の次男。太政官御用掛、衆議院属を経て、明治二十六（1893）年に毛利家に入り、長州藩史編修を主宰。大正十（1921）年には維新史料編纂会常任委員に就任している。
- 著書に『大村益次郎先生伝』（稲垣常三郎、1892年）、『高杉晋作伝』（民友社、1914年）、『防長近世史談』（大小社、1927年）等がある。他に『空齋山田伯伝』三十巻等があるが今に至るも未刊。
 - 村田峯次郎編『長周叢書』（マツノ書店、1991年）下巻巻末、「看雨村田峯次郎翁年譜」から構成



村田峯次郎
『長周叢書』掲載写真

6

村田峯次郎が編集に携わった雑誌

誌名	発行者	刊行期間	巻号 国会図書館所蔵
防長学友會雑誌（第一期）	防長学友會	明治23年1月 ～ 明治24年7月	1～8号 あり
長周叢書 （マツノ書店復刻版あり）	村田峯次郎、稲垣常三郎	明治23年10月 ～ 明治25年8月	- あり
防長学友會誌	防長学友會	明治25年8月 ～ 明治26年10月	1～6号 3～6号
君子國	自強社	明治27年1月 ～ 不詳	不明 なし
防長学友會雑誌（第二期）	防長学友會	明治28年4月 ～ 明治31年5月	1～26号 1～18,24,26号
東西	晩成社	明治39年1月 ～ 明治41年12月	3巻36冊 なし
道	道の會	明治41年10月 ～ 不詳	不明 なし
防長史談會雑誌 （マツノ書店復刻版あり）	防長史談會	明治42年9月 ～ 大正3年9月	1～38号 1～38号

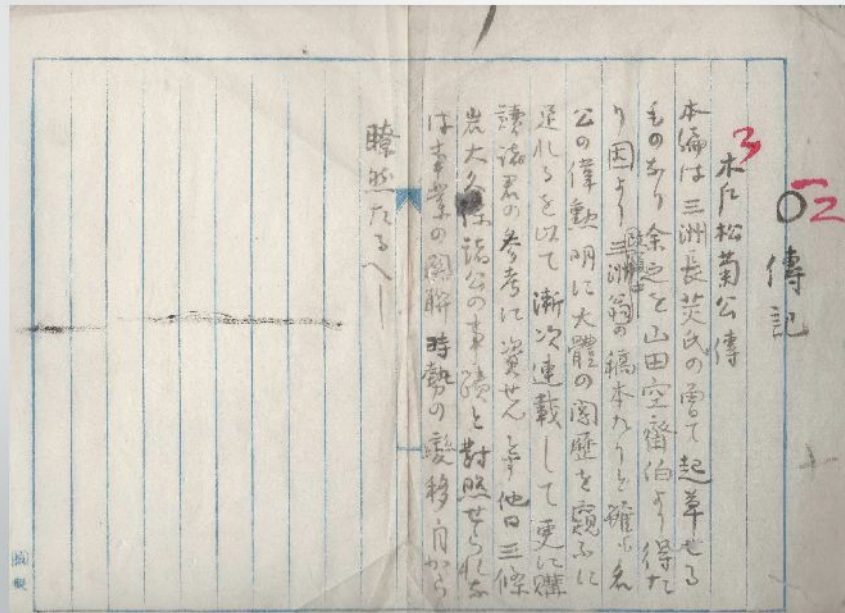
7

『内閣顧問木戸公行述』の構成

- 罫線入りの和紙に毛筆で記されたもの、六綴、79枚
- おそらく明治十年代の記述と思われるが、詳細な執筆年代は不詳。
- 『明治天皇紀 第四』（吉川弘文館、1970年）264頁、明治十年九月十九日の項の記述
 - 故内閣顧問木戸孝允の功勲を追賞して特に神道碑を賜はんとし、一等編修官川田剛に之れが撰文を命じたまふ、尋いで一等編修官長？をして孝允の行状を調査せしめらる。
- 第一綴〔一 生い立ちから大政奉還まで〕
- 第二綴 木戸公の傳（第一号ノ續）〔二 明治元年〕
- 第三綴 木戸公の傳（第二号ノ續）〔三 明治二年から明治六年の帰朝まで〕
- 第四綴 木戸公の傳（第三号ノ續）〔四 明治六年政変から明治八年江華島事件まで〕
- 第五綴 〔頭書なし〕〔五 明治八年江華島事件から明治九年八月まで〕
- 第六綴 木戸公の傳（第五號の續）〔六 明治九年九月から死まで〕

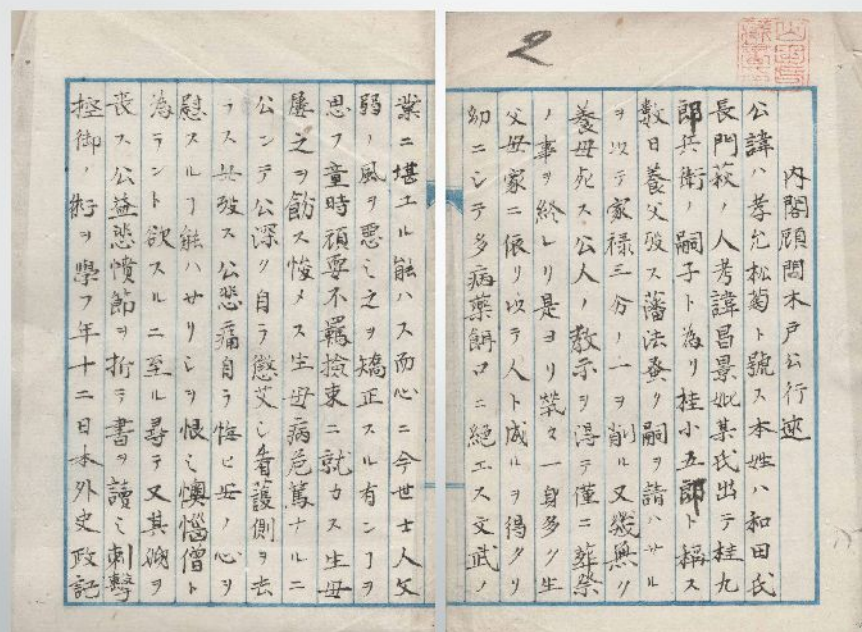
8

内閣顧問木戸公行述（村田峯次郎の序文）



9

『内閣顧問木戸公行述』（第一綴冒頭）



10

第一綴の記載事項 1

- 生い立ち
 - 公諱八孝允松菊ト号ス。本姓八和田氏、長門萩ノ人・・・
- 松下村塾での就学、江戸齋藤塾での剣術修業
 - 時ニ藩士吉田松陰、松下邨塾ヲ開キ、文学気節ヲ以テ・・・
- 黒船来航
 - 嘉永癸丑ノ歳六月、米利堅水師提督彼理軍艦四隻ヲ率テ浦賀港ニ来リ・・・
- 松陰の下田渡海から安政の大獄まで
 - 既ニシテ松陰潜ニ米舶ニ附シ洋外ニ出ントスルヲ以テ、幕府ノ譴ヲ獲・・・
- 有倫館設置、坂下門外の変、京都政局
 - 壬戌歳、日比谷ノ藩邸ニ有倫館ヲ設ケ、皇漢洋学部ヲ建テ・・・
- 文久二年八月十八日の政変
 - 癸亥八月十八日、朝議俄ニ変シ、長藩兵堺町門ノ宿衛ヲ罷メ・・・

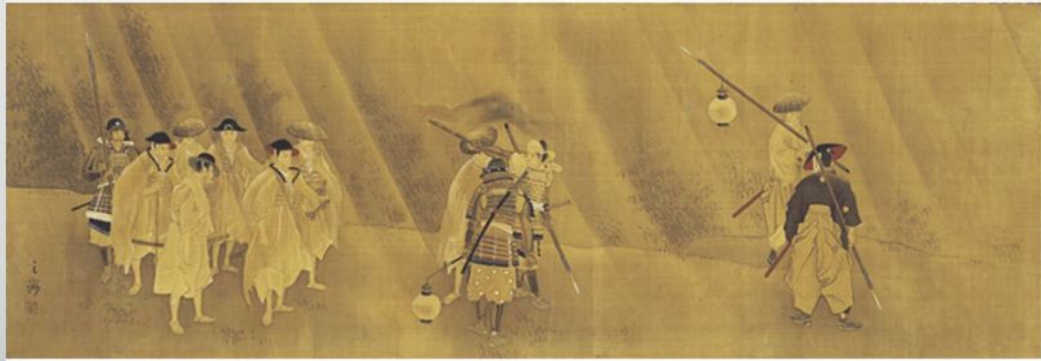
11

第一綴の記載事項 2

- 禁門の変、七卿の都落ち、丹波潜伏
 - 甲子七月十八日ノ変、公豫メ因藩ノ應援ヲ約シ・・・
- 第一次幕長戦争
 - 幕府、尾張大納言ヲ以テ総督ト為シ、大舉シテ長州ニ迫ル。・・・
- 第二次幕長戦争（四境戦争）
 - 而幕府再征ノ事起ル。公久シク丹波ニ在リ、歸ル？ヲ得ス。・・・
- 薩長同盟
 - 甲子八月ノ変ヨリ、薩長隙アリ。而幕府ノ再ヒ長を討ツヤ薩亦肯テ・・・
- 大政奉還
 - 是時幕府時勢ノ不可ナルヲ知り、遂ニ大政奉還ノ疏ヲ上リ・・・

12

〔参考〕三洲の「七卿落図」



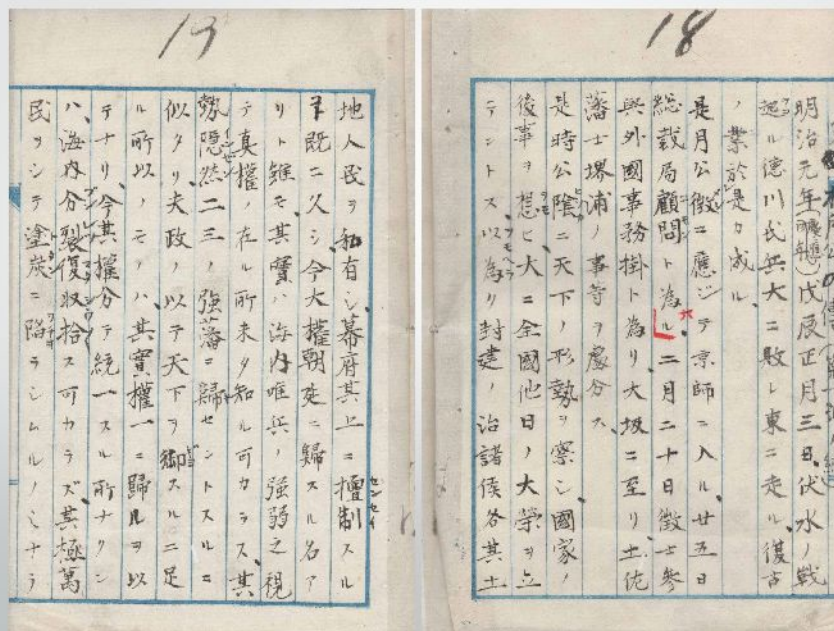
長三洲画「七卿落図」山口県立博物館所蔵

<http://db.yamahaku.pref.yamaguchi.lg.jp/script/detail.php?no=809> (2021年5月29日閲覧)

- 三洲には珍しい人物画。
 - 「七卿落図」は、八・一八政変に敗れた三条實美ら七人の公家が久坂玄瑞らとともに長州へと都落ちした事件を描いた画題で、他に沢宣嘉や東久世通禧等の当事者が、後年回想により描いたとされるものが知られているが、三洲のこの画は、それらの原型になったものではないかと推測される。

13

『内閣顧問木戸公行述』（第二綴冒頭）



14

第二綴の記載事項 1

- 鳥羽伏見の戦い
 - 明治元年（慶應四年）戊辰 正月三日、伏水ノ戦起ル・・・
- 総裁局顧問就任、境港攘夷事件
 - 是月、公徴ニ應ジテ京師ニ入ル。廿五日総裁局顧問ト為ル・・・
- 版籍奉還、廃藩置県に向けた木戸の存念
 - 夫維新ノ業政權ヲ-- 朝廷ニ収ムルヲ名トシ、徳川氏ヲシテ其私有セシ土地人民ヲ奉還セシメタリ。則諸藩モ亦宜ク之ニ倣フヘシ。而諸藩ハ尚依然其舊ヲ改メズンバ、唯其の至正至公ノ心ヲ失フノミナラズ、維新ノ名モ亦果シテ何カ在ルヤ。是誠ニ治亂興廢ノ機ノ繫ル所ナリ。今日ノ謀ハ速ニ諸藩ヲシテ其土地人民ヲ還納セシムルニ在リ。若號令一タビ廢シテ之ヲ奉スルモノナリ。遽ニ紛亂ヲ招クコトアラバ、是天運ノ未回ラザル所ニシテ、人力ノ能ク為ス所ニアラズ。今藩ヲ廢セサルモ、未其必治ヲ保ツ可カラス。藩ヲ廢スルモ亦其必亂ヲ期ス可カラス。亂ハ一ナリ、寧藩ヲ廢シテ以テ一新ノ名ヲ實ニスルニ若カンヤ。
- 五箇条の御誓文
 - 三月公上言ス。開國ノ詔-- 先帝既ニ之を發ス。・・・

15

第二綴の記載事項 2

- 天皇の大阪行幸への随行
 - 天皇大坂ニ幸ス。公ヲ京師ヨリ召ス。・・・
- 浦上四番崩れにおけるキリシタン処分
 - 長崎浦上邨ノ民、陰ニ耶蘇教ヲ奉スルモノアリ。・・・
 - 公長崎ニ至リ、裁判處總督澤宣嘉等ト議シ・・・
- 戊辰戦争における木戸の方針
 - 時ニ關東餘賊大ニ起ルノ報アリ。廷臣江戸城ヲ棄テ、退テ函嶺ノ險ヲ・・・
 - 新潟八開港ノ約地タルヲ以テ速ニ兵艦数隻ヲ遣シ、港内ヲ嚴守シ・・・
- 東京遷都（奠都）
 - 六月十九日江戸ヲ以テ東京ト為シ、將ニ東幸セントスルヲ以テ・・・
- 旧主毛利？への版籍奉還の進言
 - 先是公長崎ニ之ク。途ニ山口ニ過リ、舊主長？ニ説クニ・・・

16

第二綴の記載事項 3

- 木戸が旧主に説いた版籍奉還論
 - 夫國土ハ-- 天子ノ國土、幕府ノ私有ニ非ス。而シテ諸? 皆封ヲ幕府ニ受ケルガ如シ。是今ノ諸? ハ王臣ニ非ス、幕府ト諸? ハ君臣ナリ等ノ説アル所以ナリ。名分ノ乖戾之ヨリ甚キ者アラズ。今名分ヲ正サント欲セバ、天下ノ諸? ヲ率ヱテ版籍ヲ朝廷ニ奉還シ-- 朝廷ノ處分ヲ仰クニ若クハ莫シ。顧フニ一たび版籍ヲ奉還スルモ未必シモ直ニ其封土ヲ失ハズ。要スルニ朝廷ノ直管ニ歸スルノ意ヲ失フ可カラサルノミト。
- 北越戦争戦端開く
 - 八月東幸ノ期既ニ決ス。公詔書ヲ草ス。越後長岡城・・・
 - 時ニ北越ノ戦甚急ナルノ報アリ。公上書シテ自ラ赴キ、・・・
- 天皇東幸へ随行
 - 時廿日公東幸ノ駕ニ從フ。
- 宮中改革の提言
 - 公又以為ク-- 皇土春秋鼎富、時ニ及ンテ聖徳ヲ涵養セスンハアル可カラス。・・・
- 徳川氏に輦路警備を命ずる進言
 - 先是-- 車駕ノ東幸スルヤ、駿河地方虞ス可キノ報アリ。・・・

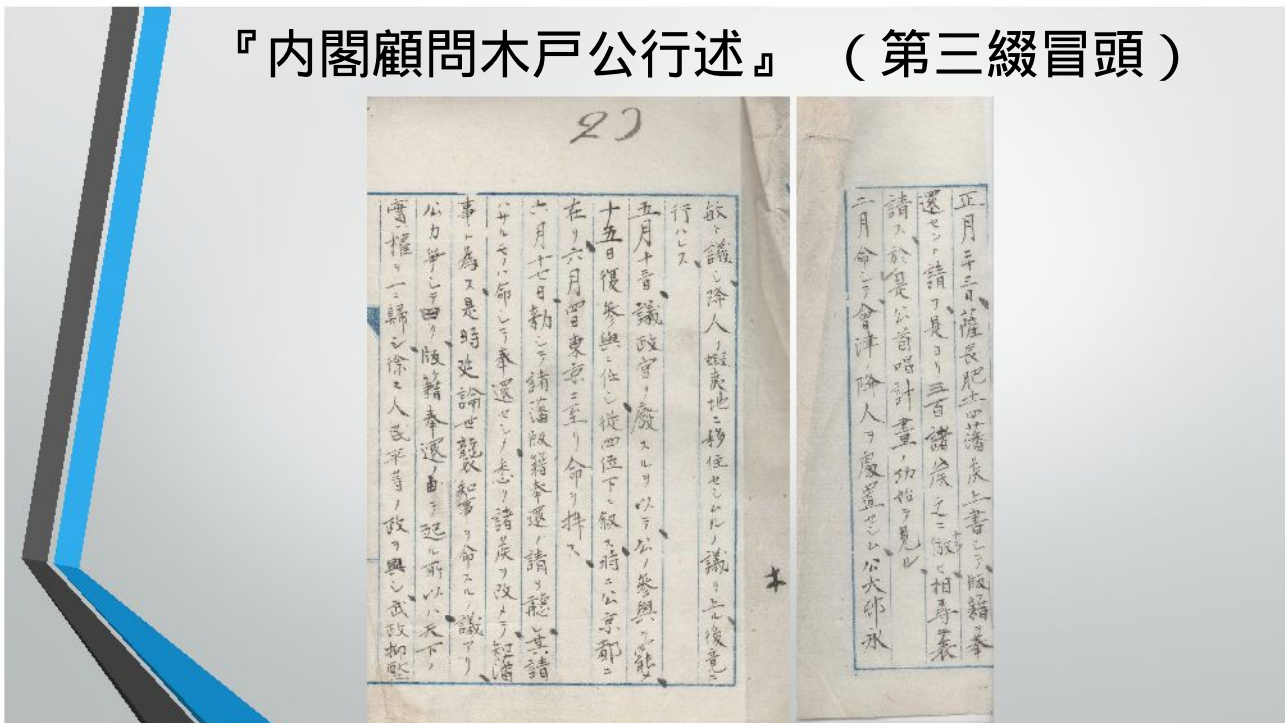
17

第二綴の記載事項 4

- 会津藩の降伏、東北処置
 - 會津已ニ降ル。松平容保父子東京ニ至ル。廷議或ハ寛典ニ處スルノ説・・・
- 賞典に関する建言
 - 十一月百万石ヲ分テ、復古及戦功之臣ヲ賞スルノ議アリ。・・・
- 教育宣布の建言
 - 夫國ノ富弱ハ人民ノ富強ニ生ズ。人民無識貧弱ナルトキハ、富強ス可カラスシテ、維新ノ政モ亦空名ニシテ實ナキナリ。願クハ人民ノ知識ヲ開誘スル為メニ、文明各國ノ規則ヲ取捨シ、徐ニ學校ヲ全國ニ興シ、教育ヲ宣布センコトヲ。是今日ノ急務ナリ。而シテ事必歲月ヲ費ス。今宜シク其端ヲ開クヘシ。徒ニ急進シテ、文明各國ノ外形ヲ模擬スルハ、決シテ良圖ニ非ス。或ハ反テ國家人民ノ不幸ヲ釀成スルヲ恐ルルナリト。
- 朝鮮使節派遣の建言
 - 十二月十四日公岩倉輔相ニ進説ス。其目ニアリ曰ク。其一ハ天下ノ方向・・・
- 版籍奉還
 - 其一ハ天下ノ名分ヲ正スナリ。今ノ諸? ハ鎌倉以来、・・・

18

『内閣顧問木戸公行述』（第三綴冒頭）



19

第三綴の記載事項 1

- 版籍奉還の実現
 - 正月二十三日、薩長肥土四藩？上書シテ、版籍ヲ奉還セント請フ。・・・
 - 実際の薩長土肥4藩の版籍奉還建白書の上書提出は明治2年1月20日。
 - 明治2年6月17日までに主要な藩の奉還が聴許。歴史的にはこの日が成立日。
- 待詔院出仕
 - 七月八日、官制位階ノ改定アリ。公ノ參與ヲ罷メ・・・
- 従三位、永世禄一千八百石、辞表提出
 - 九月廿六日、復古功臣ヲ賞シ、公ヲ従三位ニ叙シ・・・
- 山口への帰郷の命
 - 十二月三日、山口藩ニ差遣スルノ命アリ。又明春将ニ支那朝鮮ニ國ニ・・・
- 諸隊の叛乱
 - 公山口ニ至ル。隊兵擾亂ス。知藩事説諭シテ、之ヲ散セシメントス。隊兵益暴亂ナリ。公因テ陰ニ豊浦、清末、徳山、若國四藩ト之ヲ鎮壓スルヲ謀リ、又干城隊ヲ萩ヨリ召シ、藩廳ヲ守ラシム。干城隊遷延未至ラス。庚午正月隊兵益乱シ、遂ニ藩廳ヲ圍ム。且公ヲ素ル甚急ナリ。公遂ニ身ヲ潜テ馬關ニ至リ、諸兵ヲ合シ、豊浦等四藩兵ト約應シ、返撃テ隊兵ヲ破リ、事僅ニ定マルヲ得タリ。

20

〔参考〕木戸孝允日記より

明治3年 1月26日	朝佐々木吉富長瀧等来る頃日同志のもの終日不絶来訪切に又国を憂るもの亦不少十字過急報あり認食結髪一字過出家干時有人諸隊御館を囲み通行を絶つと告るものあり依て余心益相進み強て登館せんと新道に至る橋上左右土壘亀山春日山に出兵せり干時一老人馳せ来り田陰に伏し声を潜め余の登館をとどむ則館中よりの通と云此ものは水仁也依て余其より道をかへし一旦毛利に至り御館の様子を窺ふ 御館近辺甚厳に相囲み一人の通行と雖も不相忿然決意直に帰宿す長亦来て有家長今日余の先を行一丁許干時兇徒大に余の政府を輔けしを怨み切に余を探索するの説あり今日有故長と同行せず又一丁許にして水仁の告るによって終に不思今日の難免る（後略）	第一 314-15頁
明治3年 1月27日	雨終日吉富に滞居す山根秀輔来訪後数事件を相託す爾他竊に来り訪ふ者も又多し七字過瀧に吉富を出同行のもの佐々木長吉富余と四人なり（後略）	第一 316頁
明治3年 2月6日	暁より雨東風尤甚十二字頃に至り漸穏なり與諸子乗乙丑艦田ノ浦に至る干時又西風尤烈長府の諸兵艦に乗ることを得ず昨日時機を外し今日又時機を延ぶ残慨不堪櫻井長二氏丁卯に乗り長府の様子を問はんと欲し丁卯に不能達風潮の為に田ノ浦の濱に漂着す干時日没し不能如奈今晚の事を宇部の兵隊に達す吉富佐々木鳳翔丸に乗て行此時西風又強し九字頃隊長河野亀太郎長府より今日乗艦の難出来事を告げ来る	第一 318-19頁
明治3年 2月16日	晴登館作間栖夢明日より東京へ発す則書幹を託す数件肝要の事あり依て作間を撰らふ有地熊蔵児玉七十郎等頃日皆歸る今日御前会議前途御著手の順序稍相定四字過帰家（家に帰る今日始なり）山縣長児玉等来る小酌相談伊勢翁十二字頃来訪翁は明日より其縣倉敷に発す	第一 323頁

〔参考〕長太郎「閼藩人民二告諭書」

- 一 明治三年之奉伺録ヲ閲シテ二月廿五日之条中ニ至レハ長太郎二告諭書綴調被仰付候と有之、是当時政府ノ定議ニ依テ記シタル事則知ヘキナリ、故ニ巻首ニ書シテ読者ノ便ニスル事左ノ如シ
 - 此度山口藩脱退騒動ノ事ヲ世上ニテ評スル者ノ論ニ、山口藩ノ諸隊ト号スル者ハ、癸亥以来其国家ヲ維持シタル大功アル者ナリ、然ルニ此度其隊ヲ除キ騒擾ヲ生スルニ至リ、卻テ新編ノ常備兵ヲ助ケシハ、是有功ノ者ヲ棄ルナリ、公平ノ所置ニ非スト云フ説アル由、成程一応尤ナル論ノ様ナレトモ、全ク皮相ノ見ニテ其实ヲ知ラサルノ説ナリ、夫有功ヲ賞シ有罪ヲ罰スルハ、言ハテモ知レタル国ノ大法ナリ、イカニ上ノ威権アレハトテ、有功ヲ棄ル如キ政ニテ一日モ其国ヲ持ス可ケンヤ、癸亥以来諸隊ヲ編成セシヨリ、其興廢分合八度々アリシカトモ、内外数十度ノ攻戦多ク、諸隊ノ力ニヨリシハ実ニ論者ノ言ノ如シ（中略）又脱退人攘夷ヲ唱へ、全ク天下ノ為メニ議論を起セリト云ヒ、諸国頑愚固陋ノ徒往々艶説スル者アリト聞ケリ、是等ニ至リテハ捧腹ニ堪エサル之ヲ艶説スル者モ其遠識ナク達智ナク、真ニ天下ヲ憂フルノ徒ニ非サルヲ知ルニ足レリ、可悲矣（石川卓美・田中彰編『奇兵隊叛乱資料 脱退暴動一件記事材料』マツノ書店、1981）

〔参考〕脱退諸士招魂碑



- 山口市大内、柊刑場跡地。
- 明治26年に建てられた脱退諸士の供養塔で三洲撰書の碑文が刻まれている。
- 碑文は三洲畢生の名文と称されている。



23

〔参考〕脱退諸士招魂碑

- 碑文の読み下し文
 - 死は或いは太山より重く、或いは鴻毛よりも軽きも死は一なり。その趣くところは異なると雖もその悲しむべきは同じ。尊攘の義興りてより、防長の士民奮って国事に殉じ、死に赴くこと、帰するが如き者、その幾百千なるを知らず。不幸にしてその守るところを失し、その趣くところを誤り、罪辟に陥り以て斃る者、またあげて数ふべからず。その重き者は招魂の祭あり、封増の典あり。その軽き者は烏鳶（うえん）に委ね、？ 蟻（ろうぎ）に卑す。骨骼は荒草浅土に狼藉して収領せず。その始は、皆奮って国事に殉ぜし者なり。その前功また没すべからず。而るに人は徒に、その重き者を悲しんで、その軽き者を悲しむなし。これ豈、仁人君子の心ならんや。今、有志の者、残屍を原野の間に求め、集めてこれを葬り、石を立て以てこれを表す。その知り得べからざるもの、蓋し多からん。今の収まるところ、僅か十に一のみ。悲しいかな。余、すなわち文をつくりて石に勒し、？ にこれを仁人君子に？ く。

明治癸巳一月

從五位 長?? 書

24

〔参考〕三洲・松菊がともに写された写真



明治3年4月26日、鹿児島に向けた長州藩毛利元徳使節一行。木戸は後列中央、右隣一人おいて三洲。揃いで格子柄のシャツを着用している。
(撮影：長崎 上野彦馬)

25

第三綴の記載事項 2

- 参議就任
 - 六月公東ニ歸リ、十日参議ニ任ス。七月四日、官ヲ? セント請フ。・・・
- 旧藩調整
 - 十一月廿五日、去年公大久保利通ト謀リ、-- 朝旨ヲ以テ・・・
- 外国人刺傷事件
 - 時ニ外國人二人ヲ、東京ニ刺傷スルモノアリ。嚴ニ命シテ・・・
- 山口叛乱兵の取り締まり
 - 山口ノ隊卒、去歲網ヲ脱スルモノ、及各藩不逞ノ徒相嘯集シ日田縣ノ・・・
- 版籍奉還後の藩政釐革
 - 岩倉大納言鹿児島ニ至リ、命ヲ島津久光ニ傳フ、會久光病アリ・・・
- 土禄によって土禄を支鎖する法の建言
 - 三月公復山口ニ歸リ、藩政釐革ノ事ヲ與聞ス。土族ノ常職ヲ解クノ・・・

26

第三綴の記載事項？

- 西郷と並んで参議に再就任
 - 廿五日制度一変ヲ以テ、諸参議皆罷メ、西郷隆盛参議ニ任ス。公亦即日・・・
- 廃藩置県
 - 七月十四日、是時ニ當リ、天下ノ形勢漸変シ（中略）於是公ノ説漸行ハレントス。七日井上馨ヲシテ、西郷隆盛ノ意ヲ問ハシム。隆盛断然之ヲ諾ス。於是公ノ三數年長計遠慮スル所、始テ其機ヲ得タリ。八日、公遂ニ之ヲ論決ス。會山口知藩事毛利元徳、亦其職ヲ？スルノ請アリ。九日、公、西郷隆盛、大久保利通、西郷従道、大山巖、井上馨、山縣有朋ト會シ、廢藩置縣ノ事ヲ定ム。十二日、西郷、大久保ト密議シ、之ヲ大臣ニ告ケ、上奏制可ヲ請フ、是日一 詔シテ藩ヲ廢シテ縣ト為シ、在京五十六藩知事ヲ罷メ、十五日二百六藩知事ヲ罷ム。於是郡縣ノ制始テ定ル。初公天下ノ大勢ヲ察シ郡縣ニ非サレハ、以テ一 皇國ヲ振起シ外萬國ニ並立ツルコト能ハス。諸？争分シテ國內分裂センコトヲ思ヒ、之ヲ三條、岩倉公ニ説ク。當時ノ勢決シテ行フ可カラサルヲ以テ、苦思遠計一ノ謀策ヲ發シ名分ヲ正シ、版籍ヲ奉還スルノ説ヲ主張シ、遂其事ヲ成セリ、而世議紛々或ハ公ヲ殺サント欲スルモノアルニ至ル。公挫セス撓（タコ）マス、隱忍出沒、以テ其機ヲ窺フ。而今日ニ至リ、公ノ議ヲ助クルモノ漸多ク遂ニ七百年ノ旧套ヲ一洗シ、皇國萬世ノ政體ヲ定ムルコトヲ得タリ。公ノ皇國ノ為メニ力ヲ盡ス、大且遠シト謂ツヘシ。

27

第三綴の記載事項 4

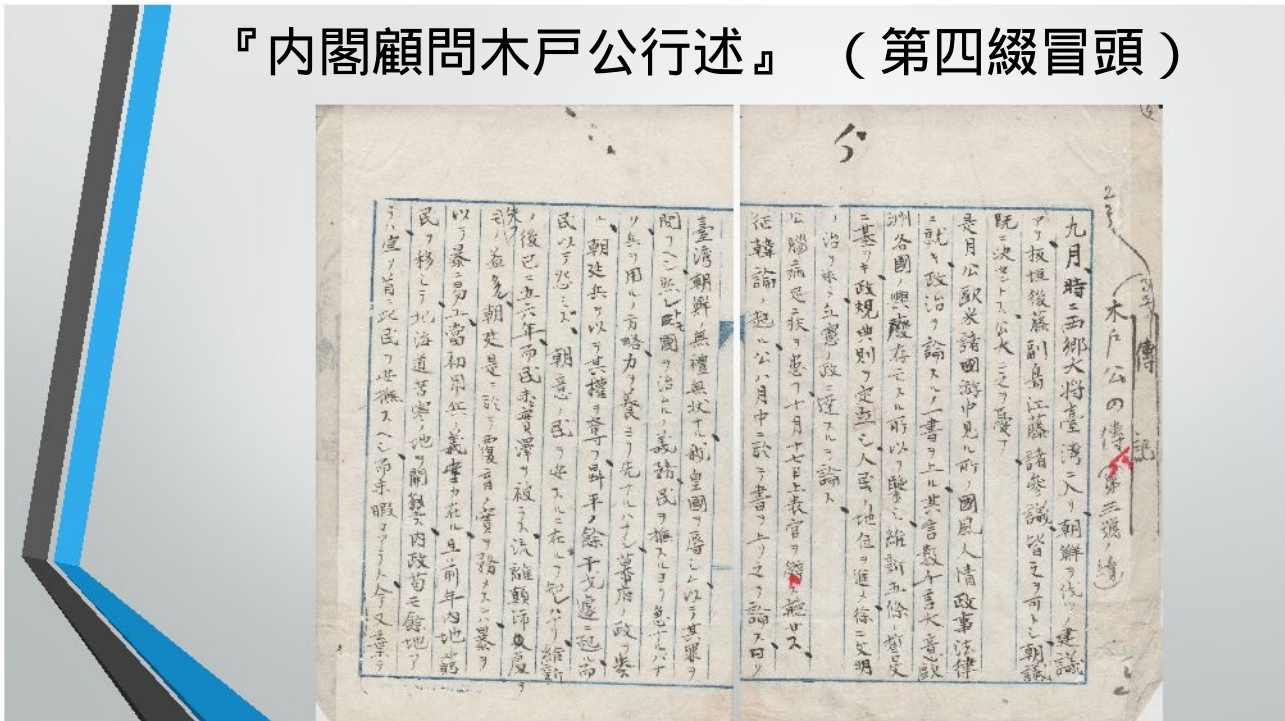
- 岩倉遣欧使節団
 - 十月八日特命全權副使ト為シ、欧米各國ニ差遣スルノ命アリ。・・・



岩倉使節団、左から木戸孝允、山口尚芳、岩倉具視、伊藤博文、大久保利通

28

『内閣顧問木戸公行述』（第四綴冒頭）



29

第四綴の記載事項 1

- 留守政府における征韓の議
 - 九月、時二西郷大將臺灣二入り、朝鮮ヲ伐ツノ建議アリ。・・・
- 欧米巡遊中の木戸の上書——立憲政体論
 - 是月公欧米諸國游中見ル所ノ國風、人情、政事、法律ニ就キ、政治ヲ論スルノ一書ヲ上ル。其言數千言大意歐洲各國ノ興廢存亡スル所以ヲ鑒ミ、維新五條ノ誓文ニ基ツキ、政規典則ヲ定立シ、人民ノ地位ヲ進メ、徐ニ文明ノ治ヲ求メ、立憲ノ政ニ達スルヲ論ス。
- 征韓論に対する木戸の上書
 - 曰ク、臺灣朝鮮ノ無禮無狀ナル、我皇國ヲ辱シム。以テ其罪ヲ問フヘシ。・・・
- 木戸の政体論（続）
 - 政體徒ニ歐米ノ美ヲ模擬スルモ、人民ノ知識相懸隔シテ、實地未行フ可カラサレハ、却テ人民ノ不幸ヲ来タシ國ノ損害ヲ招クヲ以テ、事々皆著實ヲ主トシ、輕行急歩ヲ戒メ徐ニ文明ノ域ニ入ルヲ務ムヘシ。因テ數事ヲ策ス。・・・

30

第四綴の記載事項 2

- 非禄税議及減禄制の上書、華族制の提議
 - 十二月七日、税ヲ士禄ニ課スルノ議アリ。公非禄税議及減禄制ヲ上ル。・・・
- 文部卿就任、佐賀の乱
 - 廿五日、文部卿ヲ兼任ス。
 - 二月、佐賀士族乱ヲ作ス。内務卿大久保利通、九州ニ之キ之ヲ鎮撫ス。・・・
- 台湾出兵への反対、文部卿辞任
 - 癸酉三月、於是臺灣ヲ征スルノ議起ル。公去年ニ於テ既ニ其非ヲ極論シ・・・
 - 四月二日、臺灣用兵決議書ニ署名印セシム。公？シテ印セス。・・・
- 山口における士族授産教育の手配
 - 公山口ニ在リ。士族ノ多ク常産ヲ失フモノアルヲ憂ヒ・・・
- 尾大の弊
 - 今日ノ弊尾大ヨリ生ス。今亦全國ノ大兵ヲ募集ス。他日尾大ノ種子ヲ下スナリ。内乱ノ基必此生ス。而兆民獨其害ヲ被ラントス。請切ニ之ヲ減セヨ。郡縣ノ政體某等其始ヲ為スニ於テ微力アリ。故ニ今縣ニ在ル、務テ士民凝結ノ舊習ヲ解散シ、封建ノ弊ヲ破ラントス。・・・

31

第四綴の記載事項 3

- 日清両国互換条款
 - 十一月、清國違言ノ事議將ニ諧(トトノ)ハサラントス。朝廷伊藤・・・
- 大阪会議（明治8年2月11日）
 - 乙亥二月、公乃大阪ニ至リ、大久保参議ニ會ス。去年十二月廿七日、歸京ヲ促スノ命ニ接ス。會伊藤参議ヨリ来リ、板垣正形高知ヨリ至ル。遂ニ相會シテ、将来施治ノ方向ヲ論ス。議頗合ス。東久世侍從長、詔書ヲ奉シ来テ、公ヲ召ス。乃大久保板垣等ト施治ノ倫序ヲ約シ、先後皆東京ニ還ル。
- 参議に再任、元老院設置、大審院設置、地方官會議
 - 三月八日公再参議ニ任シ、宮内省ノ事ヲ兼理ス。板垣氏亦参議ニ復ス。・・・
- 宮内省における天皇への輔導
 - 公宮内省ノ事ヲ視ルヤ、常ニ聖徳ヲ啓沃輔導スルヲ以テ念トス。・・・
- 江華島事件
 - 九月、朝鮮江華ノ警報アリ。三月来公政府ニ在リ國事ニ拮据ス。・・・

32

『内閣顧問木戸公行述』（第五綴冒頭）



33

第五綴の記載事項 1

- 島津久光（左大臣）、板垣退助（参議）の辞任
 - 二十二日、嶋津、板垣二氏朝ヲ去ル。斯時二方テ朝野ノ議紛々。・・・
- 江華島事件（続）、参議辞任、内閣顧問就任
 - 朝鮮ノ警、國ノ大事ナリ。吾公ニシテハ國家ノ難ニ當リ・・・
 - 二月中朝鮮和好成ル。公遂ニ官ヲ？ス。・・・
- 天皇の木戸邸（染井別邸）訪問
 - 四月十四日聖駕公ノ染井別業ニ臨ミ、慰諭甚渥シ、金及物ヲ賜フ。・・・
- 金禄公債発行条例（秩禄処分）
 - 金禄公債發行條令出ツ。公謂ク廢藩ノ舉、公理ヲ以テ之ヲ論スレハ・・・
- 明治9年8月の木戸の上書
 - 維新ノ業ハ、聖天子ノ至仁ニ基テ成ル所ナリ。若其政ヲ施ス、輕躁ニ失シ、繁苛ニ陥リ、人民ノ幸福ヲ圖ルコト能ハズンハ、遂ニ維新ノ實ヲ失ハシ。夫人民ハ其慣習ニ生活セサル者少シ。故ニ遽ニ其慣習ヲ變スレハ、必生活ノ路ヲ失ヒ、政府モ亦終ニ其患害ヲ受ルニ至ル。故ニ一旦已ム？ヲ得ス。封建ノ治ヲ變シ、人民ノ方向ヲ改ムト雖モ、其慣習ノ如キハ、當ニ懇ニ其得失利害ヲ察シテ、之ヲ因革シ、遽ニ其生活ヲ失フニ至ラサシムヘシ。是政府ノ政府タル所以ニシテ、國家富強ノ本、亦必是ニ在リ。

34

第五綴の記載事項 2

- 明治9年8月の木戸の上書
 - 今郡縣ノ制定レリ。則益實利ヲ擴充スルヲ務メ、人民ニ不利ナルモノハ、之ヲ淘汰セシムハアルヘカラス。然而言路開テ、刑罰寛ク、冤者自ラ訴ルコトヲ得ト雖モ生活ノ道ニ至リテ、或ハ反テ封建諸藩ノ舊ニ如カサルモアルニ似タリ。其故何ソヤ、嚮ニ諸藩ノ人民ヲ制馭セシ、刻ハ則刻ナリ。
 - 然トモ其心各封内ヲ安スルニ急ナルヲ以テ、物産ヲ殖シ學校ヲ設ルカ如キ、皆金穀ノ資ヲ吝惜セス、其功ヲ遠大ニ収メシコトヲ期セサルハナシ。故ニ國トシテ人材ナキハ無ク、地トシテ物産ナキハ無シ。今ハ政府既ニ諸藩ノ土地人民ヲ収メテ、微シク其壓制ノ刻ヲ？メタリ。則資ヲ學校物産ニ盡シ、公利公益ヲ興スノ業ハ、政府宜クカヲ此ニ用ユヘシ。
 - 而封建ノ制變セシヨリ後、政府ノ施為或ハ此ニ出テス。所在ノ人民漸ク生産ヲ失ヒ、貨泉流レス物産殖セス、學校多ト雖モ、所謂普通小學ニ止マリ、中學以上ノ學ヲ興シ、或ハ師ニ都會ニ就クノ資ナシ。偶資ヲ得テ一ノ業ヲ成スモノアルモ其材能地方ニ用ナキヲ以テ、官游歸ラサルモノ比々皆是ナリ。夫人材物産ハ國家ノ頼テ以テ立所ニシテ、今既ニ此ノ如シ。

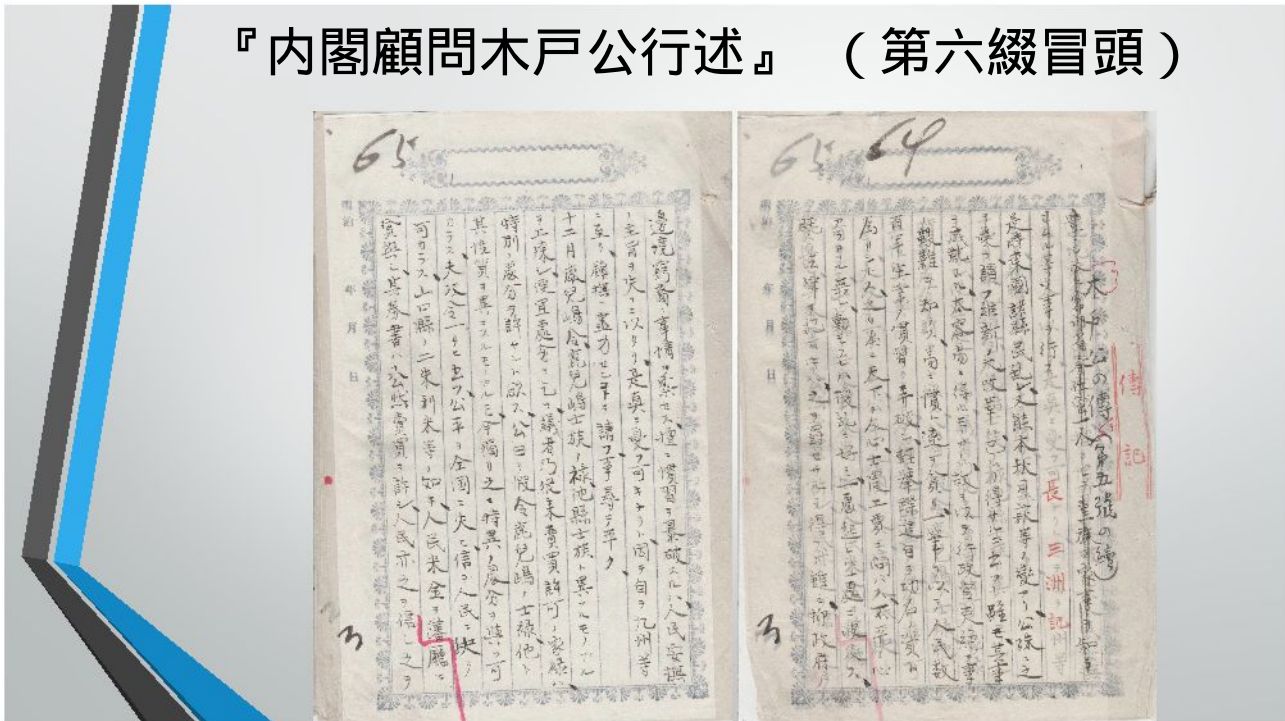
35

第五綴の記載事項 3

- 明治9年8月の木戸の上書
 - 夫置縣ノ初ハ、務テ舊来ノ積習ヲ變セン？ヲ期ス。故ニ地方ノ官吏、率子皆他郷ノ人ヲ採レリ。是一時ノ權宜。勢然ラサル？ヲ得ス。然モ其間強藩ノ餘威ニ籍リ、其官吏皆土人ヲ用ヅ、敢テ他郷ノ人ヲ置カサルモノ、今ニ至テ猶之アリ。
 - 然ラズンバ封建ヲ變シテ郡縣ト為シ、壓制ノ苦ヲ？メント欲スル者、徒ニ人民ノ禍ヲ致スニ過キス。而天下後世ノ責、果シテ誰ニカ歸セン。思ハサル可ケンヤ。民選議員ハ歐米各國其設アラザル無シ。比年以來論者之ヲ冀望スルモノ多シ。
- 天皇の地方巡幸に同行
 - 六月、車駕東巡ニ扈從シ、民間ノ事情地方ノ衰残ヲ觀テ・・・
- 宮内省出仕を兼務
 - 八月三日、宮内省出仕ニ兼補シ輔翼ノ事及省中一切ノ務ヲ協辦セシム・・・

36

『内閣顧問木戸公行述』（第六綴冒頭）



37

第六綴の記載事項 1

- 頻発する土族反乱
 - 是時東國諸縣民乱レ、又、熊本、秋月、萩等ノ變アリ。公殊ニ之ヲ憂フ。・・・
- 鹿児島島の状況
 - 十二月、鹿児島令、鹿児島土族ノ禄、他縣土族ト異ナルモノアルヲ上陳シ・・・
- 地租軽減の上書とそれを受けた詔
 - 茨城、三重二縣民乱ル。公地租改正ノ急施ニ過キ、公正ヲ失フモノアルヲ・・・
 - 明治丁丑一月四日、地租ヲ減スルノ詔アリ。公去年以来上言スル所・・・
- 西南の役勃発
 - 二十四日、車駕大和京坂ニ幸ス。公扈從ス。會鹿児島ノ警報至ル。・・・
 - 公獨リ之ヲ憂ヒ、朝政ヲ妨害スルハ、鹿児島ナリト極言スルニ至ル。・・・
 - 是時ニ當リ、公謂フ今日ノ事、人民ノ不幸之ヨリ大ナルナシ。然トモ勢固ヨリ已ム可カラズ。夫憤習ヲ顧ミ政令ヲ省キ、以テ人心ヲ収攬スルハ平時ノ事ナリ。今日ノ勢ニ至テハ、則反スルモノハ反セシメ、去ル者ハ去ラシメ、政府ハ唯當ニ断然、其根本ヲ一定ス可キノミ。此大節ニ至テハ、百折不挫ニアラサレハ、以テ真太平ヲ買フ、能ハス。天下蒼生ノ為メニ死カヲ盡ササル可カラスト。其下民ノ疾苦ヲ思フノ情益切ナリ。

38

第六綴の記載事項 3

- 金禄公債による資金の付与方法について
 - 公嚮ニ華族金禄ノ事ヲ論ス。而公債條例已ニ發ス。二月九日・・・
- 西南の役の戦況
 - 月ノ末、公木ノ葉、山鹿ノ戦、未決セサルヲ聞キ、兵ヲ八代ニ送り・・・
- 病状悪化
 - 四月ニ至リ、宿病復發ス。遂ニ肝臓膨張ノ症ト為ル。天皇侍醫某々ヲシ・・・
- 永眠
 - 廿六日、遂ニ薨ス。公天保四年癸巳、六月廿六日ヲ以テ生ル。年四十四薨スルノ前数日、既ニ昏然タリ。猶国事ヲ痛苦シテ已マス。喃喃獨語スル者、甚解ス可ラスト雖モ皆国事ナリ。
- 木戸の臨終に立ち会った三洲
 - 余公ト京師ニ在リ。先憂後樂四字ノ印ヲ刻シ、公ニ贈レリ、公頗喜色アリ、公薨後公ノ日記ヲ讀ム。公託シテ曰ク。三洲余カ為ニ、先憂後樂四字ヲ刻ス。最余ノ心ニ契セリ。戦事紛擾ノ中之ヲ得、近日之一快心事ナリト。嗚呼公終ニ後樂ノ情ヲ遂ル? 能ハス。悲夫。

39

内閣顧問木戸公行述から読み取れること 1

- 『内閣顧問木戸公行述』全体の叙述配分
 - 本稿本は、維新以前の事績は最初の一綴にまとめられており、残る五綴が、維新後の事績に割かれている。年数で示すのであれば、木戸が誕生した天保四年6月26日（1833年8月11日）から、大政奉還の慶応三年10月14日（1867年11月9日）に至る三十三年間が一綴にまとめられ、残る五綴で明治元年（慶応四年）から、木戸の死、即ち、明治十（1877）年5月26日に至る十年間が記されている。
 - 木戸の伝記作者としての三洲は、勤王の志士、桂小五郎を描くより、創設当初の明治政府を支えた政治家としての木戸孝允を叙述することに重きを置いている。そして、そのような政治家、木戸孝允の生涯を通して描きき出そうと努めたのは、内憂外患の絶えない維新直後の初期政権の政治過程において、「封建」対「郡県」の相克の中から、治国平天下の筋道を見出そうと苦闘した、政治家の肖像である。

40

内閣顧問木戸公行述から読み取れること 2

● 木戸の政治思想の描写

- 本稿本で、三洲の筆は、具体的な木戸の行動事績の描写は最低限に留め、木戸の政治思想が現れている、実際の政治過程で採用されることは少なかった建白書等の要諦を示すことに努めている。
- いずれも天保四年生まれの木戸や三洲において、その教養の根幹は儒教的世界認識に置かれている。三洲の政治思想は、木戸が発刊に携わり、三洲も協力した『新聞雑誌』に静妙子名で発表された「新封建論」と「復古原論」に集約されている。
 - 然則我邦、近古、未タ外敵ノ虞アラサルトキハ、封建ノ治、固ヨリ不可ナルハナシ。今日外万国ヲ引受テ、而我自主自立ノ權ヲ全フセント欲ス、則区々封建ノ制、豈能天下ヲ維持センヤ。或ハ云フ、封建郡県必シモ、其利害ヲ論セス。苟其君主ノ權能天下ニ行レ、政柄其本ヲ失ハサレハ、郡県ト雖、亦必分裂シテ、其害タル封建ニ異ナラスト「新封建論」中島三夫編『三洲長? 著作選集』(中央公論事業出版、112頁)
- 上記に示した「新封建論」の議論は、本稿本でも再演されている。それはやはり、吉田松陰などの一君万民論に由来する天皇親政論であり、その理念のもとで、木戸は、封建から郡県への転換、即ち版籍奉還を成し遂げ、廃藩置県を断行するに至る。
- しかし、その体制の転換によって、直ちに治国平天下が成るものではない。「新封建論」は、そのような木戸が達着する困難を予告していたともとれ、郡県ト雖、亦必分裂シテ、其害タル封建ニ異ナラスト。


41

内閣顧問木戸公行述から読み取れること 3

● 日本国内における「国家有機体論」の先駆

- 廃藩置県を成し遂げた木戸は、直後、岩倉遣欧使節団の副使に任じられ、欧米を経巡る長途に赴く。木戸は欧米を見聞することで、急進的な改革の危険性を悟り、漸進的な立憲政体論者となって帰国する。
- 明治六年の政変を経て参議（後に兼文部卿）に復帰するが、翌年の台湾出兵に抗議する形で参議を辞職し、山口に帰郷する。さらにその翌年、大阪会議で、漸進的に立憲政体を樹立し、三権分立や二院制議会の確立を目指すことを条件として、参議復帰を受け入れ、江華島事件に際しては朝鮮との交渉の任につこうとするが、病を得て歩行困難となり、明治九年3月には再び参議を辞し内閣顧問となっている。
 - 天下ノ勢之ヲ人身ニ譬フ、諸縣ハ四肢ナリ、政府ハ頭ナリ。其間ニ流通循環シテ、全身ヲシテ偏枯ノ憂ナカラシムル者ハ、氣血ニシテ猶資材ノ流通スルカ如シ。比年以来政府盡ク、天下ノ金穀ヲ諸縣ヨリ徴集シ、諸縣ヲシテモ權ヲ其間ニ有シ、其支用ニ任スルヲ得ザラシム。是諸縣日ニ衰ニ就クノ源因ニシテ、所謂氣血流通セスシテ四肢將ニ偏枯セントス。四肢偏枯セハ頭腦安ゾ獨全キヲ得ンヤ。今此憂ヲ防カント欲セハ、政府ト諸縣ト、其會計ヲ異ニシ、其權ヲ地方ニ分與シ、而地方ノ官ヲ擧クルハ人オヲ其士ニ選フニ如クハナシ。
- 「新封建論」で「尾大の弊」を指摘しているのだから、このように政体（国家）を人体に譬える思考の展開は、ある種自然なものかもしれない。

42



三洲と松菊——長三洲著「内閣顧問木戸公行述」に寄せて
ひとまず了 ご清聴ありがとうございました。

中島久夫